

さまざまな表現を、守り、育む

ちばてつやさん (下)

漫画家。1939年、東京生まれ。1956年、貸本向け単行本でデビュー。代表作『あしたのジョー』『おれは鉄平』『のたり松太郎』『あした天気になあれ』など多数。2002年、紫綬褒章受章。文星芸術大学マンガ専攻教授。日本漫画家協会理事長。

や賞」の審査などを通じて、若い人たちの作品をたくさん見させていただきました。とくに感じるのには、若者の作品は世相を反映していることです。全体的にちよつと暗いですね。いじめ、家庭内暴力、うつ、自殺…。

昔のマンガのキャラクターは、元気で表情もイキイキしていて、なりたいたいものになるために、目をキラキラさせていました。今のキャラクターを見ると、表情が暗く、目つきの悪い三白眼(白眼が多い)の登場人物が多い。若者たちには、今の日本人の顔がそういうように見えているのかもしれない。

若者のマンガに限らず、『ワンピース』のような冒険活劇は少なく、先の見えない、不安になるような作品が多いのは気になります。

もちろん、一人ひとりが感じることも、その人の表現は大事にしたい。しかし、人間ってすてたもんじゃないういよ、ということも知ってほしい。

私が大学で出会うのは10代の若者です。彼らには、人と話したり、本を読んだり、映画をみたり、音楽を聴いたり、いろいろな経験をするなかで人間としての根っこをつかっていってほしい。

太く、深く、根をはると、幹も太くなって、ちよつとぐらいの風では倒れません。たとえば、部屋にこもって一人でゲームばかりしていたら根っこは育たない。学生には、根をはりなさい、根をはりなさいとよく

●原発に目を向ける学生たち

私は2005年から大学でマンガを教えています。今年の卒業制作で、ある学生は、福島に行って、原子力発電所の取材をして、マンガを描きました。実態を知り、福島の人たちと話をすることで、彼は結局福島に住むことになりました。これからもマンガで原発のことを発信し続けると言っています。

昨年は、福島出身の学生が、自分が生まれたところを訪ねて歩きました。建てたばかりの家だった実家はきちんとしていたけれど、庭は草だらけ。自分が通っていた高校のグラウンドに行ってみたら、黒板に野球チームの名前とスコアが白墨で途中まで書いてある。そんな現地のような写真を撮ってきていました。

原発事故によって、広い土地が汚染されて、そこに平和に暮らしていた人たちが、故郷に戻れず、家族が

話しています。

●自由で豊かな表現を守る

マンガやアニメは非常に規制しやすい分野です。「子どものためによくない」と、マンガやアニメの表現を法律で規制するような動きが、東京など行政でありました。

外国ではマンガの規制が強い国もあります。女性の胸が出ているだけで発禁になる。だから母親が子どもとお風呂に入る場面を描いたら本が出ない国もありました。

たとえば、ラフレシアという花があります。この花はトイレのような強い臭いを発し、死肉に似た色やベトベトした質感で、花粉を運ぶハエを誘います。スマレや桜のようなきれいな花がある一方、ラフレシアのような花もあることで、花の世界が豊かになります。

マンガも同じで、いろいろなものがあることが大切です。規制が強まると、作家や出版社、書店による自粛もすすみます。日本では表現の自由を守ってきたから、マンガやアニメは内容が豊かで世界的にも評価さ



『私の八月十五日① 昭和二十年の絵手紙』から私の八月十五日の会著、今人舎

©ちばてつや

れています。

●人間としての根をはる

1980年から始めた「ちばてつ

アダルトコミックや児童ポルノなどもありますが、取り締まる制度はありません。ルールは大事だけれど、上からの規制はいけません。

ある大臣は「政治的な公平性を欠く放送を繰り返し、改善されない場合、電波停止を命じる可能性がある」と発言しました。これもとんでもないことだと思います。

●70年以上守ってきた憲法

日本国憲法には、国民みんなが権利をもっていること、一人ひとりを守ること、そして、戦争はしないこと、などが書かれています。

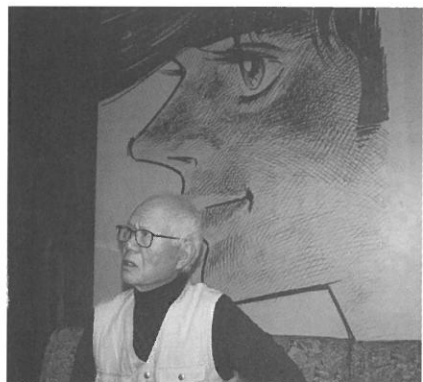
日本国憲法はアメリカに押しつけられたという人がいますけれど、私は、世界の国の憲法のいいところを集めて、日本人とも話をしてつくったものだと思います。

ほんの70年前、焼け野原になってしまった日本。

先人たちは「もう二度と戦争などという愚かな道を歩まない」と決意し「憲法」という道しるべを残してくれました。そのおかげで日本は、今に至るまで平和に歩んでこられたのです。

僕はそんな日本を誇りに思うし、これからずっと「戦後」が続いてくれることを願っています。

(4月1日収録)



取材メモ



表情が暗く、目つきの悪いキャラクターのマンガが多い…。原発事故、安保法制、表現規制など、どれをとっても平和な国からどんどん離れていき、明るい未来を展望できないように見える。でも、ちばさんは、安保法制に反対した学生や若者たちの姿をみて「これが希望ですね」と語ります。

現地の人の助けで満州から生き延びた。福島を訪れてマンガで発信をすることを決めた学生がいた。どうしようもないように思える時代に、なおあきらめずに生きようとする人たちがいる。その経験が「人間ってすてたもんじゃないう」という言葉につながっているように思います。ちばさんの人間への信頼と温かさが、壁に描かれた矢吹文の表情に現れているようでした。